

琵琶湖博物館第三次中長期基本計画 (後半見直し版)

出あい、学びあい、琵琶湖を世界へ発信する博物館へ



滋賀県立琵琶湖博物館 第三次中長期基本計画（後半見直し版）

目次

1 琵琶湖博物館について	
1－1 琵琶湖博物館の使命と基本理念	1
1－2 中長期計画に基づく計画的な発展	2
(1) 琵琶湖博物館中長期基本計画	
(2) 新琵琶湖博物館創造基本計画（第二次中長期基本計画）	
1－3 社会状況と琵琶湖博物館の課題	3
(1) 社会状況	
(2) 琵琶湖博物館の課題	
2 第三次中長期基本計画の体系	7
2－1 趣旨	
2－2 期間	
2－3 計画の構造	
3 計画のゴールと事業目標	8
3－1 琵琶湖博物館の使命から想定される 10 年後の社会の姿	
3－2 中長期計画後半（令和 8 年度～令和 12 年度）における取組の方向性	
3－3 事業目標	
3－4 各事業目標の詳細と重点事業	9
事業目標 1 琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介	
事業目標 2 資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備	
事業目標 3 みんなで学びあう博物館へ	
事業目標 4 もっと使いやすい博物館へ	
事業目標 5 より多くの人が利用する博物館へ	
事業目標 6 持続可能な博物館づくり	
4 計画の進行管理	15

1 琵琶湖博物館について

琵琶湖博物館は、「湖と人間」をテーマに、琵琶湖の自然や歴史、人々の暮らしを扱う総合博物館として平成8年（1996年）4月に設置され、同年10月に開館しました。これまで、「湖と人間」について考え方行動する主体である地域の皆さんと共に研究や資料収集活動を行い、その成果を展示や交流活動を通じて広く知らせることで人々の活動を応援してきました。

1-1 琵琶湖博物館の使命と基本理念

琵琶湖博物館の使命 存在意義／果たすべき役割

琵琶湖博物館は、人々が湖とともに生きることについて考えるための情報や機会を提供しています。琵琶湖博物館はみなさんとともに、琵琶湖とその周囲の自然や湖とともにある暮らしの多様性や成り立ちについて探求し、発見したことを広く共有し、ともに学びあう場を創ります。また、貴重な資料を将来にわたって保管・継承し、多くの人々に使えるようにすることで、みなさんの活動を世代を越えて応援・継承します。

基本理念 活動の指針／どんな博物館を目指すか

- テーマをもった博物館
「湖と人間」というテーマにそって未知の世界を研究し、成長・発展する博物館
- フィールドへの誘いとなる博物館
魅力ある地域への入口として、フィールドへの誘いの場となる博物館
- 交流の場としての博物館
多くの人びとによる幅広い利活用と交流を大切にする博物館

1－2 中長期基本計画に基づく計画的な発展

琵琶湖博物館は、使命や基本理念に沿って計画的に発展するために、これまでふたつの中長期計画を策定して事業を進めてきました。

（1）琵琶湖博物館中長期基本計画「地域だれでも・どこでも博物館」

期間：平成 17 年度（2005 年度）～平成 27 年度（2015 年度）

平成 14 年（2002 年）に中長期目標「地域だれでも・どこでも博物館」を策定し、誰もが琵琶湖や身近な地域の価値を発見する活動ができるようになること、またそれぞれの活動を博物館が応援できるようになることを、博物館の進むべき目標として掲げました。

この目標を達成するため、平成 17 年（2005 年）に琵琶湖博物館中長期基本計画を策定し、第一段階として「資料が活かせる博物館」「研究を進めて活かせる博物館」、第二段階として「新たな参加と発見ができる博物館」「体験と交流を促す博物館」、第三段階として「対話と応援ができる博物館」としての強化を順次進めました。その結果、地域の人々と博物館が共同で研究や展示・交流活動を行う素地が形成されるとともに、個人の参加を促す仕組み（フィールドレポーターやはしけけ）が充実しました。また、地域の方々からの依頼に応えて学芸員が講師を務める地域連携も定着し、幅広いニーズにも応えられるようになりました。

（2）新琵琶湖博物館創造基本計画 「博物館の『木』から地域の『森』へ」

期間：平成 28 年度（2016 年度）～令和 2 年度（2020 年度）

第一次の中長期基本計画に続いて、平成 26 年（2014 年）に「新琵琶湖博物館創造基本計画」（第二次中長期基本計画）を策定し、展示・交流空間の更新と交流機能の充実を進めました。開館から 20 年間の博物館の研究成果をもとに常設展示を最新の情報に更新するとともに、体感的な展示やユニバーサルデザインを導入することで、誰にも使いやすくわかりやすい展示づくりを行いました。また、屋外展示の観察ができ、琵琶湖に直接触れ合える樹冠トレインの設置や、資料の収集・保管と利用について理解を深め、実際にそれらを活用して人々が活動を行える「おとのディスカバリー」の設置など、利用者自身が博物館を使って探求できる環境の充実を図りました。さらに、地域とのつながりを強化するため、地域連携による企画展や、地域の文化財を活用した展示などを実現しました。

りの強化を目指して企業など多様な主体との連携を開拓し、研究や交流・展示活動などを共同で行うようになりました。

1－3 社会状況と博物館の課題

(1) 社会状況

● 新型コロナウイルス感染症対策と「新しい生活様式」

令和2年（2020年）から令和5年（2023年）5月までは新型コロナウイルス感染症によって多くの博物館が長期間の休館を余儀なくされ、開館後も「三密」回避のために館内的人数を制限する状況が続きました。こうした状況の中、感染を防ぐ「新しい生活様式」のもとでの博物館の今後の活動のあり方が問われました。今後も未知の感染症など想定できない社会状況となることも想定し、この困難な状況で実施した対応を活かせるよう準備を進めることが必要です。

また、そのような博物館への訪問に制限がある中で注目を集めたのが、インターネットを介したオンラインサービスです。休館期間中、国内外の博物館や美術館が普段の行事で使っている素材の提供、動画による展示室の様子の配信、SNSでの収蔵品の紹介などのサービスの提供に取り組みました。

後述するオンライン社会の到来との兼ね合いで、来館しないで博物館を利用できる各種のオンラインサービスは、「アフターコロナ」の時代においても、博物館利用の重要な形態になりつつあります。従来、博物館の業績を評価する際に最もよく使われる指標は来館者数でしたが、これと並んでオンラインサービスによる博物館の利用も指標に加える検討が始まっています。

● ICT技術の進化に伴うオンライン社会の到来

インターネットの普及とICT技術やAIの進化によって、オンラインを前提とした新たな消費や流通、経営の形が生み出され、経済の構造が大きく変化しつつあります。

博物館・美術館でもこの変化に対応する動きが出ています。高精細画像や3D画像での収蔵品のオンライン閲覧や、VRによる展示室の観覧などの新しいサービスが開発され、従来の展示観覧では不可能だったさまざまな体験の提供が試みられています。5Gの導入によって大容量のデータのやり取り

が可能となり、また、AIの活用も踏まえ、サービスの質や種類は飛躍的に向上すると考えられます。

魅力的なオンラインサービスは、博物館や収蔵品の魅力を国内外の広い範囲の人に届けることができる有力な広報ツールにもなります。このため、オンラインサービスには、博物館の来観者を増やす効果も期待されています。

● 観光と博物館

観光立国政策や文化観光推進法の制定、博物館法の改正などにより、博物館には観光拠点としての期待が高まっています。実際に、新型コロナウイルス感染症の影響が収束した後は、訪日外客数が過去最大となるなど再び観光が盛んになっています。特に、国内旅行・訪日旅行のいずれでも、集団で有名な観光地を巡る団体旅行から、自分で訪問先を選んで体験を楽しむ個人旅行に主流が移行しています。後者においては、旅行先の選定にインターネットの情報やSNSによる口コミ情報が大きな役割を果たしており、旅行者が来館前から博物館等の情報を取得できることが、訪問先に選ばれるための重要な要素となっています。

● 持続可能な社会への取り組み

令和12年（2030年）をゴールとする国連の持続的な発展のための開発目標（SDGs）には、国内外で取り組みが進んでいます。県においては基本構想にSDGsへの取り組みが盛り込まれているほか、関連して琵琶湖の環境に関するMLGsなどの取り組みや環境学習でもSDGsが意識されています。また多数の企業やNPOがSDGsに向けた取り組みを展開しています。博物館においても、SDGsを取り上げた展示やSDGsを意識した取り組みが行われるようになってきており、ソーシャルインクルージョン（社会的包摂）や生物多様性保全への対応の深化も求められています。

● 災害と博物館

水害や大型地震による博物館の建物や標本・資料への被害が頻発するようになり、災害への備えと、被災後の復旧体制の整備が急がれています。単館での災害への備えが必須となっているほか、被災した場合に博物館同士で助け合うレスキュー網の整備も進んでいます。

（2）琵琶湖博物館の課題

- リニューアルした展示・交流空間の活用とフィールドへの展開

最新の研究成果や展示手法を取り入れた展示・交流空間のリニューアルは令和2年（2020年）10月に第3期工事が完成し、展示室が公開されました。体験を重視し、ユニバーサルデザインを積極的に取り入れた展示は好評を得ており、今後、より多くの人に利用されることが期待されています。

リニューアルした展示が「湖と人間」のよりよい共存関係に貢献するためには、展示室での体験が単なる知識の伝達に終わることなく、来館者と共に理解を深め、考え、調べる契機にもなる場として活用される必要があります。展示室を使ってなにかを「する」ことや、それがフィールドでの活動につながる仕組みをつくることが次の課題となります。

- 新型コロナウイルス感染症対策を踏まえて

新型コロナウイルス感染症の蔓延を防ぐため、「新しい生活様式」に沿った運営を行うことが求められました。このため、令和2年（2020年）には、事前予約制度を導入して入館者数の上限をコントロールしたり、触れる展示物や展示コーナーを閉鎖したり、あるいは交流行事の規模を縮小したりするなど、「三密」を回避する対応を行ってきました。こうした経験を踏まえて、今後の想定できない社会状況となった際にも対応できるよう準備を進めることが重要です。

- オンライン時代への対応

インターネットを介したオンラインサービスは博物館の新しい利用の形として重要性を増しています。当館は既に資料データベースや電子図鑑などのオンラインサービスを提供していますが、この活動を新しいICT環境に合わせて進化させていく必要があります。オンラインサービスの充実のためには、提供する素材の準備も欠かせません。そのためには研究成果の蓄積とともに、資料の整理を進めることが重要であり、これらがより一層進むための環境の確保が課題となります。また、サービスの質の向上を図るために、利用状況の把握方法や、改善のための評価指標の開発も必要です。

オンラインサービスは、より広範囲の人々に琵琶湖や琵琶湖博物館の魅力を伝えることができるため、その活用に向けた新たな取組も必要です。

● 持続可能な社会への取組を支える交流事業の活性化

SDGsへの取組が盛んになるなか、さまざまな人々に学習のための機会を提供する交流事業は一層の充実が望まれます。一方で、交流事業は増加の一途をたどってきていることから、博物館単独での対応には限界があります。こうした状況に対応するため、これまで培ってきたさまざまな主体との協力関係を活かし、より多くの人が博物館とともに創り上げる交流事業の形を模索する必要があります。新しい交流事業では、一方的な知識の伝授ではなく、人々が集い、情報を交換し合うことで新たな出会いや発見が継続的に生まれ出される仕組みづくりが重要です。

琵琶湖博物館は希少な淡水魚の保護・増殖に取り組んでいるほか、さまざまな希少生物の保全のための研究や実践を積み上げ、その知識やノウハウをもとにさまざまな地域の保全活動に協力してきました。また、地域の人々とともに化石の発掘や生物分布の調査を行うなど、地域の人々が自らの地域を知り、理解するための研究活動を、ともに創り上げてきました。このような地域の人たちと連携した研究とその成果の活用は、博物館職員が単独で行いうる以上の情報収集や研究の発展を可能にするだけでなく、地域の人々が自ら地域の価値を探求し解明しようとする機運を高めます。入口としての観察会や講座だけにとどまらず、保全活動の実践や研究への参加など、より深い活動も交流事業の主要な柱として進めていく必要があります。

● 施設・設備の老朽化と災害への備え

開館後約30年が経過し、長寿命化の工事等を進めていますが、博物館全体を支える建物や設備、機械類の更新を図っていくことが求められています。特に建物の老朽化に伴う漏水や地盤沈下による配管等への影響、空調関係の機械類の不調は博物館活動の生命線ともいえる標本・資料の保管に影響を与えることが危惧されており、できるだけ速やかな対応が求められます。

関連して、災害への備えも充実していく必要があります。これまで以上にゲリラ豪雨時の対策、地震への備えを設備面で進めるとともに、被災後の復旧計画についても不断の見直しを行う必要があります。

2 第三次琵琶湖博物館中長期基本計画の体系

2-1 趣旨

新琵琶湖博物館創造基本計画（第二次琵琶湖博物館中長期基本計画）が令和2年度（2020年度）で終了したことから、新たな活動方針として、第三次琵琶湖博物館中長期基本計画を策定しました。この計画では、これまでの取り組みの成果を踏まえつつ、10年後にあるべき社会を想定して、その実現に向けた方針を定めています。

2-2 期間

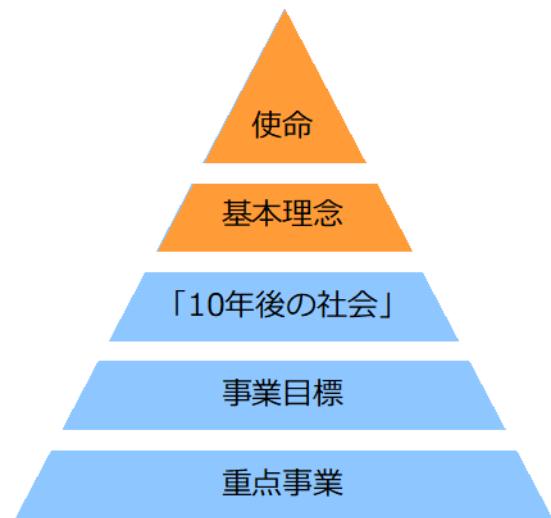
令和3年度（2021年度）から令和12年度（2030年度）の10年間とします。ただし、変化の激しい社会状況を勘案して、中間段階の令和7年度（2025年度）に進捗状況や計画の妥当性について検討を行うこととしており、今般、令和8年度（2026年度）から令和12年度（2030年度）の後半見直しを行います。

2-3 計画の構造

博物館の「使命」と「基本理念」を長期間にわたって守るべき基本方針と位置付けます。

その下に第三次中長期計画のビジョン（将来像）として「10年後の社会の姿」を想定し、その実現に向けて博物館が取り組み、達成すべき項目を「事業目標」として設定します。

また、事業目標達成のために重点的に取り組む「重点事業」を配置します。重点事業は将来に向かって行う挑戦的な事業であり、おおむね5年で一定の成果が見込めるものを想定しています。



3 計画のゴールと事業目標

3-1 琵琶湖博物館の使命から想定される10年後の社会の姿

多くの人が琵琶湖とともに生きることの価値を感じることができ、その幸せが将来にわたって継承されていく社会。誰もが日常の中で、湖との暮らしのより良いあり方を探求・実践でき、その成果を多くの人と共有する機会を持っています。また、さまざまな人々が出会い、学びあうことで新たな発見や活動の持続が可能になっています。

「10年後の社会」における琵琶湖博物館の役割

国内外の人々が琵琶湖やその周囲の暮らしの価値や魅力に興味を持ち、いつかは琵琶湖を訪問したいと考えている状態で、琵琶湖博物館は地域の人々と共に研究を進め、琵琶湖の新たな価値や魅力を常に探究し発信することで、より多くの人に気づきを喚起しています。その結果、実際に訪問した際には、琵琶湖をより深く理解するための「入口」としての機能を果たしています。また、地域で湖との持続可能な共存を模索する人々は博物館を訪問し、あるいは自宅や活動の場でオンラインにより、博物館の持つさまざまな知的資源を利用できるようになっています。それらの人々は博物館に日常的に集って学び合い、出会いによって新たな発見をしています。

3-2 中長期計画後半（令和8年度～令和12年度）における取組の方向性

琵琶湖博物館は、開館から30年近くの年月を重ね、琵琶湖の魅力を掘り起こし、「湖と人間」について地域の人々とともに考え、行動する博物館として、地域に根付き、定着してきました。琵琶湖博物館が将来にわたり、その役割を果たし続けるためには、琵琶湖博物館が持つ多面的な価値・役割をそれぞれの視点から見つめ直し、さらにその取組を深化、そして進化させることが必要です。

このため、これまでの取組の成果や社会情勢の変化等を踏まえ、中長期計画後半（令和8年度(2026年度)から令和12年度(2030年度)）においては、「び

わ博3つのチャレンジ」として、①もっとたのしく、もっとおもしろく（展示、PR、フィールドへの誘い）、②もっとひろく、もっとつよく（交流・連携）、③もっとびわこ、もっとおどろき（資料、研究、発信）をテーマに各種事業を進めることとします。併せて、長期的視野に立って、持続可能な博物館づくりに向けた各種計画の策定や仕組みづくりに取り組みます。

3－3 事業目標

想定する社会の情況を実現するため、今後の活動の方向性を示すものとして次の事業目標を設定します。また各目標に対して重点事業を設定します。

事業目標1 琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介

事業目標2 資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備

事業目標3 みんなで学びあう博物館へ

事業目標4 もっと使いやすい博物館へ

事業目標5 より多くの人が利用する博物館へ

事業目標6 持続可能な博物館づくり

3－4 各事業目標の詳細と重点事業

事業目標1 琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介

琵琶湖やその周りの暮らしの価値を地域の人々や国内外の研究者とともに発見し、その魅力を国内外に広く発信します。

琵琶湖は世界でも希少な古代湖であり、固有種を含む豊かな生態系や、その恩恵によって育まれたユニークな文化を持っています。これらは、湖と人間のより良い共存を考える上で欠かせない、世界に誇るべき琵琶湖の価値です。長い歴史を経て共進化してきた生命文化複合体としての『琵琶湖』の価値を地域の人々と共に研究を通して深く掘り下げ、国内外にその成果を発信することで多くの人が琵琶湖やその周りの暮らし、琵琶湖博物館に注目することを目指します。

重点事業

1－1 世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究の推進

琵琶湖の成り立ちや固有種の進化については未解明の部分が多く残されています。また、古代湖特有の文化の形成過程についても研究は端緒についたばかりです。さらに、刻々と変化する現在の古代湖の環境や、古代湖のある地域に暮らし利用する人々との関係を知ることが、未来に向けたよりよい関係のあり方を考える重要な手がかりになると考えられます。これらについて、地域の人々や国内外の研究者と共に国際的な視野で研究を進めます。さらに、企業や団体と連携した研究や市民参加型研究の充実を図ります。

1－2 研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える

研究で明らかになった多面的な琵琶湖の魅力について、常設展示や企画展示での発信に加え、海外博物館・研究機関との連携を活かして世界に発信します。また、書籍の出版や、研究論文の公表を積極的に行い、より深い興味を持つ人にもアピールします。また、研究成果の積極的な行政・企業への提供も進めます。

これらを通じて、世界中の多くの人が琵琶湖の価値を認識し、観光や研究で、滋賀県・琵琶湖を訪問したいと考えるようになることを目指します。

1－3 研究の質を高める環境の整備ならびに研究の活性化

国際的に認められる研究成果を出すには、学芸職員が最新の知識を常に学ぶとともに、研究の遂行に必要な設備を整える必要があります。このような研究環境を確保するため、業務体制の見直しや研究備品の確保を進めます。また、国内外のさまざまな研究機関・企業・団体と連携し、さまざまな外部資金を積極的に活用することで、研究の活性化を図ります。

事業目標 2 資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備

貴重な標本・資料を将来にわたって人々が利用できるよう、適切な整理・保管を進めるとともに、ICTを活用した利用方法の開発により、琵琶湖博物館の知的資源を「だれでも・どこでも・いつでも」使えるように整備します。

琵琶湖博物館では、琵琶湖やその地域に関連した多様な分野で、将来的に継続して残すべき資料を『滋賀県立琵琶湖博物館資料整備に関する基本方針』に従って、収集から整理、保管、利用まで一貫して資料整備を行っています。特に収集は、研究調査・展示等の活動に伴う収集を基本に、専門家、関係機関、地域の人々と協力を計りながら日々充実させています。

これまでに、琵琶湖博物館には、国の登録有形民俗文化財である漁具・船大工道具をはじめ、過去から現在に至る地層・化石・動物・植物・微小動物など、琵琶湖の自然や人々の暮らしの価値を発見するための貴重な標本・資料を収蔵しています。これらを適切に整理・保管して、数十年、百年先の将来にも活用できるようにするとともに、現在の人々が日常生活の中でも資料を活用できる方法を開発します。

重点事業

2－1 標本・資料の管理体制の強化

標本・資料の安全な保管環境の確保のために、開館から約30年が経過して老朽化した設備・機器を整備し、地震等の災害に備えた収蔵・飼育方法の改善を行うとともに、管理体制を強化します。また、研究の進展によって生じた新たな標本分野への対応を進めます。

2－2 標本・資料の整理の推進と公開による利用促進

計画的に標本・資料の登録や整理を進めるとともに、さまざまな外部資金を利用してより整理が進む態勢を整えます。また、登録資料のデータベース公開をより一層進め、多くの人に資料の価値を知らせ、その利用を促します。国内外の多くの研究者や地域で活動している人々に琵琶湖に興味を持つ

てもらうため、収蔵品の国内・国際ネットワークに参加し、当館の収蔵品情報の普及を図ります。

2－3 ICT を利用し、だれでも・どこでも・いつでも使える博物館を創出

最新の ICT 技術を活用して、さまざまな人が自宅や現場で、琵琶湖博物館の標本・資料の情報やそれにまつわる研究成果を日常的に利用できる、学べる電子図鑑の作成と公開など常に先進技術を取り入れた利用方法の提示を進めます。

事業目標 3 みんなで学びあう博物館へ

交流事業を知識や経験を交換し合う「学びあいの場」と位置づけ、さまざまな人々や組織と連携して充実を図るとともに、参加する人の相互の出会いが新たな活動につながる環境を創ります。

自然環境や私たちの生活の変化が著しくなる一方で、SDGsへの取組も広がっており、人々が琵琶湖について知りたいこと・知るべきことの幅が広がっています。こうした需要に応えるため、琵琶湖博物館の交流事業を再編するとともに、さまざまな人々や組織と連携することで対応の幅を広げます。また、参加者同士の出会いの場を積極的に設け、人々の新たな活動が生れる機会を創出します。

重点事業

3－1 幅広いニーズに応える交流事業の充実

交流事業に必要とされるメニューの充実を図るとともに、これまで行ってきた、地域の人々が地域に興味をもって自ら知ろうとすることへの博物館からの支援に加えて、個人・大学・NPO・企業・行政などさまざまな人々や組織と連携・協働することで、お互いに学び合う仕組みを構築し、地域の一員としての役割を果たします。ICTを利用した交流プログラムの開発を進め、家庭や学校・企業等の現場でいつでも博物館の交流メニューが使えるようになります。

また、絶滅危惧種、希少種の生息域内保全に向けた企業・団体等との連携・協働の取組を進めます。

3－2 出会いの場の創出

活動している人やこれから活動しようとしている人が日常的に出会い、新たな発見が生まれる「出会いの場」として、さまざまな人々が集まって自分たちの活動を紹介しあうイベント等を開催します。開催にあたっては、当館がハブとなった出会い、つながりの場の充実を図ります。

3－3 「深く学ぶ力」に基づく琵琶湖学習の支援

環境学習船「うみのこ」や、その他の環境学習の枠組みと連携し、学校の教員が主導的に学びを展開できる琵琶湖（環境）学習プログラムを開発します。また、教員研修や教員のネットワークによる支援を通じて、琵琶湖（環境）について教員が学べる機会を提供します。また、中高大学生への研究活動支援や研究発表・交流の場の提供などを進め、次世代育成を進めます。

事業目標4 もっと使いやすい博物館へ

琵琶湖を知る「入口」としての展示を、より使いやすく、常に成長する展示として発展させます。

リニューアルによって生まれ変わった展示交流空間の魅力を発展させるために、ユニバーサルデザイン活動のさらなる推進や、展示空間で行うプログラムの開発を行います。また、企画展によって常に最新の研究成果を紹介するとともに、計画的に常設展示を更新することで展示内容を最新の状態に保ちます。

重点事業

4－1 誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長

運営も含めて常に点検・改善を行うとともに、展示ガイドの追加、観覧プログラムの作成など、子どもや障害者、日本語を母語としない方々も含めさまざまな人に合わせた展示の使い方の開発・改善、誰もが快適に、楽しく過ごせる館内環境づくりを進めます。

4－2 「観る」展示から「観る+使う」展示への成長

リニューアルで新設した各展示室の交流コーナー、樹冠トレイル、おとのディスカバリー、マイクロアクアリウムなどを活用し、館内外の人々と協力して、これまでの「観る」展示から「観る+使う」展示や会話を後押しする展示交流の充実を図ります。

4－3 社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長

来館した人がいつでも最新の情報に触れられるよう、最新の研究や資料収集の成果を企画展示によって紹介します。また常設展示の更新を計画的に実施し、日々変化する自然環境や社会情勢、博物館職員等による研究成果などを常に反映するようにします。

事業目標5 より多くの人が利用する博物館へ

ICTを活用し「世界」を見据えた広報を開いて、より多くの人の利用を実現します。また、双方向の広報によって常に博物館の社会的評価を情報収集し、博物館の魅力向上に役立てます。

将来のより多くの利用者の獲得に向けて、インターネットを使った広報を重点的に展開します。このため、来館前から博物館の展示を楽しめるコンテンツを提供するとともに、琵琶湖の魅力に関する情報の発信を行います。これにより、国内外の人々が自宅に居ながらにして琵琶湖や琵琶湖博物館の魅力を知ることができ、訪問先としてまたさまざまな活動のための研究情報・資料の保存・提供の場として選ばれることを目指します。

重点事業

5－1 ICTを活用した琵琶湖の魅力とその入口としての琵琶湖博物館の紹介

当館ウェブサイトや、外部サイト（動画サイトなど）を利用して「古代湖としての琵琶湖」の魅力を広報するとともに、博物館の展示等への遠隔地からのアクセスを可能にすることで、当館の魅力が直感的にわかるような広報を開きます。また、県内の関係機関のサイトとの連携も進めます。さらに、より一層おもしろさ、たのしさを伝えられるよう、YouTube等のSNSを活用した発信を強化します。

5－2 双方向の広報や各種調査・評価による情報収集と事業への反映

SNSを利用した双方向の広報、来館者アンケート、インターネットアンケート、本計画の事業評価などを通じて当館の認知度や社会貢献度を測定し、事業に反映します。また、博物館の評価だけでなく広報活動の成果についても計測し、改善に活用します。

5－3 多様な主体との連携による地域への誘い

企業や団体等多様な主体との連携や様々な機会をとらえて地域へ誘う機能の強化を図るとともに、博物館の新たな魅力の向上に努めます。

事業目標6 持続可能な博物館づくり

持続可能な博物館づくりに向け、長期ビジョンの策定や施設・設備の大規模改修、財源確保の仕組みづくりを推進します。

琵琶湖は滋賀県にとって、また日本や世界の中においても、ユニークで価値の高い宝物です。これを見つめ、研究し、その価値を発信していくことは琵琶湖博物館の重要な役割です。こうした役割を果たし、事業目標1～5のような博物館の活動を継続的に行うためには、長期的なビジョンを持って、博物館活動を支える土台として、誰もが過ごしやすく、安全で安心できる施設を提供することや安定的な財源の確保に努めることが必要になります。

このため、長期的視野に立ったビジョンの策定や、施設の持続可能性を高める大規模改修、研究等の基盤となる安定的な財源確保の仕組みづくりを進めます。

重点事業

6－1 長期ビジョンの策定

琵琶湖博物館では、これまで開館当初の使命や基本理念をもとに、おおむね10年程度を視野に入れて中長期基本計画を策定し、事業を展開してきま

したが、令和 8 年度(2026 年度)で開館 30 年を迎えることを契機に、次の 30 年あるいは 100 年先も視野に入れつつ、改めて琵琶湖博物館の価値や役割、将来のあり方を議論し、提示していく必要があると考えます。このため、新たに（仮称）琵琶湖博物館長期ビジョンを策定します。

6－2 施設・設備の大規模改修

琵琶湖博物館は、令和 7 年度(2025 年度)に開館後 29 年が経過し、施設・設備の老朽化等に伴い、様々な課題が生じています。これまでから計画的に施設・設備の修繕等に努めてきましたが、多くの来館者を迎える施設として、安全で安心できる環境を提供することは何よりも重要です。このため、将来を見据えて持続可能性を高めるため、施設・設備の老朽度・健全度調査を実施するとともに、大規模改修基本計画を策定し、計画的な博物館の大規模改修に取り組みます。

6－3 安定した活動基盤を確保する財源確保の仕組みづくり

適切な入館料のあり方や展示解説等、新たな歳入確保の方策を検討します。また、引き続き、科学研究費などの外部資金の獲得や寄附、クラウドファンディングの活用等、多様な収入源の確保に努めます。また、研究費や研究備品費の財源の確保に向けて、独自の基金を設ける等、安定的な研究活動に資する仕組みづくりを進めます。

4 計画の進行管理

重点事業の進捗状況を年度ごとの実施状況（アウトプット指標）の評価によって管理します。また、重点事業が、事業目標の達成に貢献できるか否かについては、目標達成度または貢献度（アウトカム指標）で評価します。この評価は重点事業が形を成してきた時点（おおむね 3 年目から）から行い、必要に応じて修正を行います。